

私、洗濯機をさらいにくわ

原田ゆう

登場人物

上更家くすり

舞台は全場を通じて二〇一五年の三月頃。

①
あるアパートの玄関の前。

舞台上に洗濯機が一台置かれている。その洗濯機は古いアパートに時折見られるように外置きにされている。洗濯機は稼働していない。

そこへ、作業着姿の上更家くすりが台車を押し現れる。

台車には何か置かれているがカバーがかけられていて中が見えない。

くすりは台車を置くと、玄関の呼び鈴を鳴らす。応答がないことを何度か確認すると、洗濯機を抱えるように身を寄せる。

くすり (洗濯機に向かって、声を潜めて) 私です、くすりです。ご無沙汰しておりました、お元気でしたか？ 半年前、残暑の残る昼日中、あなたひとりをごに残し立ち去っていった私をまだ恨んでおいでですか？ 振り返りもせず、さようならの「さ」の一言もなく、逃げるように消えた私を許すことはできませんか？ でも、聞いてほしいんです、今更だけど聞いてほしいんです。あなたは今もこうして無事にまだ現役で、生活の、日常の、汚れと匂いのついた衣服を洗ってはすすぎ、すすいでは水をぬき、水をぬいてはすすきりと、繰り返し返される暮らしのあれやこれやを洗い流していらっしやるのだろうけれど、漸く決心が、あなたを引き取るうという決心がついて、恥ずかしながらやってまいりました。

くすりはぐつと体を洗濯機に寄せつけて、

(急に馴れ馴れしくなって)今でも覚えているよ。君がやってきた三年前のあの日、ここに越してきて一週間経っても洗濯機を選びかねていた私にあの人は、「そんな温室育ちで雨風雪に耐えられるもんですか」と大手大量家具販売店から集めてきた洗濯機のパンフレットを迷いなく放り投げると、リサイクルショップへ走り、君を台車に乗せて運んできた。「こいつですよ、こいつはずっと店先の路地で売れ残り、真夏の猛暑も極寒の真冬も耐えしのんできたんです。いつか路上の詩だって聴かせてくれるでしょう」と隈なく雑巾で拭き上げ、マクベスと君を名付けた。マクベスなんて高貴すぎると苦笑う私に「分かっています、でも、幻の血に怯え手を洗い続けるマクベスの妻のように、こいつの伴侶も落ちない汚れの夢を見てる、見続けているんです、ならばこいつは黒い魔女に唆され、どんな汚れも落としてみせると豪語した路地裏のマクベスですよ」とまったく意味不明なとんちんかんなことを返してきやがった。私は決してマクベスなんて呼んでやらなかったけれど、あの人はずっと君を「マクベス」と呼び続けた。あの人と君は本当に仲睦まじく、あの人はご飯茶碗を持ち出してはここで食べた。嫉妬のあまり、私は洗剤の代わりにトマトジュースを投入してやって、ふふふ、それもいい思いだね。あの人の白シャツは薄赤く染まり、君は血尿血便のように赤い液体を流していたっけ。

(♪ 歌う)

聞こえるの

消えないシミの

乾いて笑うあどけなさ

だけど

私はうれしいの

いつまでも

響いてくれよと

願うほど

(さらに耳を蓋にあてる) 思い出すよ、見えてくるよ聞こえてくるよ、攪拌される洋服、 旋回する水の音、そして、なによりあなたがいつちばん得意だった脱水のその振動もっ！

くすりは洗濯機の両脇に両手をおき、優しく体重をのせる。

伝わってくる振動に私の性欲がほんのりと芽生えてきます。それは性行為にも似た小さな興奮。「それは浮気ですよ」とあの人は脱水の振動が伝わり、わずかにふるえる私の背中に嫉妬をし、しかし、それで欲情したのか、背後から私をカシッと抱き、「私はどっちに嫉妬してるんでしよう」と耳元で囁くのでありました。私は高速回転する洋服を見ながら、こんな幸福の形に目眩がし、私もシアワセになってもいいんだと小さくひとりごち、ふるえと共にそんな想いをあの人に伝えていたのでありました……おおっとお、昔話に酔いしれてる場合じゃない、向中野さん、(表札を確認して)、そう、今の君の持ち主、向中野さんが帰ってきてしまうかもしれないからね、ササッと済ませてしまおう、でも、大丈夫、向中野さんは出勤中、朝の八時四〇分に家を出て、帰ってくるのはいつも夜の八時過ぎさ、なんの仕事してるかは知らないけど平日はそう、そうだろう？ 君を引き取る決心をし、私は計画を立てたんだ。吹奏楽部風の女子高生、うだつの上がないサラリーマン、アニメオタクな土方の兄ちゃん、就職を考えてるバンドマン、徘徊する痴呆の老人、ママさんテニスの練習に向かうアラウンドファイフティな婦人と、老若男女問わずあらゆる変装をしてこっそりと近くの路地に立ち、向中野さんの生活パターンを観察していたんだよ、君も気がつかなかつたらう、私の変装は完璧だったからね、でも、油断は禁物さ、向中野さんの突然の帰宅っていうこともあり得るからね。

くすりは腰につけたポーチから工具を取り出して、栓やらホースやらを取り外し始める。

慣れてるでしょ、何度もこの練習をやったんだよ、外置きにされている洗濯機を見つけては取り外し付け直し、三度ほど住民に見つかって逃げ出したりしたけどね、

平気だよ、それはわざわざ遠出して宇都宮や厚木の方で試してきたんだから、足はついてないよ。

くすりは洗濯機の蓋を開け、取り外した栓とホースを洗濯槽に入れようとするが、

はっ！

と、くすりは濡れた衣服を洗濯槽から取り出す。

向中野っ、洗濯したのを忘れて放置したまま……うわっ、生乾きの匂いがこの世で一番嫌いつ！

くすりは濡れた衣服を洗濯槽に投げ戻す。

へへん、でもね、これも想定内さ。

くすりは台車のカバーを取る。盥と洗濯板が現れ、くすりは洗濯機の側に近づける。そして、盥を地面に下ろすと、洗濯槽の中の濡れた衣服を放り投げ始める。

それぞれっ。

くすりは女性の下着に気がつくと手を止める。

……。

その下着を強く盥に投げつけ、洗濯機に襲いかかる。

てめえっ！ この野郎っ、他の女の下着を洗いやがって！ そのスケベ根性は飼い主と一緒に相変わらず！ そういえば見知らぬ女の下着を洗っていやがったことがあったなあ！ 私の復讐の冷酷さを忘れてはいないだろう？ おい、今回は何色の血を流したい？ 墨汁を流し込んで黒く……なに？ 僕は悪くありません？ 向中野さんには彼女がいるんですからしょうがないじゃありませんか、そんなことくらい想定内でしょリーサチ済みでしょっ……へー生意気になったねえ、まあいいよ、いいですよ、あんたの成長を感じ取れて嬉しいですよっ。

くすりは残りの衣服を盥に入れ替え終わると、先ほど外した栓とホースを洗濯槽にしまい、養生テープで蓋やコンセントなどを固定する。

そして、台車を洗濯機の隣にまでくっつけ、洗濯機を台車に乗せようと

するが、悪戦苦闘する。

(力が入っている)あんたちちょっと太ったんじゃないの？ 幸せ太りかい？ でもね、私だつてこの日のためにスポーツジムに週三日で通い、ウエイトトレーニングを出してきたんだ、足も腰も腕っぷしも二割増しだよこんちくしょうっ！ おんどりやつ！

くすりはなんとか洗濯機を台車に乗せる。